



子どもころ虫取りやかくれんぼをした茶畑も、これからは仕事場になります。今勉強していることを生かしておいしい狭山茶作りに取り組んでいきます

現在、お茶作りの勉強中
今学んでいることを生かして、
おいしいお茶を皆さんに提供したい

りゅう たろう
小島隆太郎さん
(国立野菜茶業試験場学生)

HITO

今回ご紹介するのは、茶業を志す小島隆太郎（18歳・鶴ノ木）くん。今年の春に高校を卒業し、現在、静岡県の金谷町にある国立野菜茶業試験場でお茶作りの勉強をしています。同校は2年制で一学年が20名。良い土壌作りからお茶の育て方、製造方法、審査法（検茶）などを実践的に学ぶことができ、全国から茶業を志す若者たちが集まっています。

お茶づくりは、とても神経をつかい、地道にやらなければならない作業が多く、茶の葉を摘む時期、製造時の火の強さひとつでその味は変わってしまいます。そして、製造が始まると、温度調節や茶の葉の状態をこまめに確認しながら作るため、朝から晩まで休めません。

実家は茶業農家で、彼で3代め。小さいころの遊び場はお茶畑でした。そこには、お茶の手入れや刈り取り



夏休みには、実家に戻り販売の研修。指導は、お母さんです。厳しい教官に作業に取り組む姿勢は真剣そのもの

の作業をするお父さんの姿があり、その仕事ぶりを見ているのが好きだった隆太郎くんは、小学6年生のころにはもう、「僕もお茶をつくりたい」と思っていたそうです。そして、成長するにつれその気持ちは強くなり、高校1年の終わりに、家業を継ぐと心に決めました。しかし翌年、お父さんが他界。直接お茶作りを教えてもらうことはできませんでした。

隆太郎くんは「先代より続く製茶業がやりたくて今の学校に来ました。いろいろなことを覚えて、お茶一筋で頑張ります。」と、常にお茶作りを意識し授業や実習に取り組んでいます。そして、「卒業したら、肥料まきから製造まで今勉強していることを生かして、より良質のお茶を作って、もっと生産量も増やしたいですね。」と意欲を見せます。さらに、「もちろん製造だけでなく、お店にも出ますよ。」と笑顔で話してくれました。卒業まで1年半、隆太郎くんはたくさんのお客さんに気に入ってもらえるおいしいお茶作りをめざしています。

狭山の生態系 65

コサメビタキ

(スズメ目ヒタキ科ヒタキ亜科)

全長13cm。雌雄同色で、上面は褐色がかかった灰色、下面は白色で頸線と胸に不明瞭な縦斑があります。目の周りと眼先は白く、細い嘴と足は黒色です。日本へは東南アジアなどで越冬したものが、夏鳥として九州以北に渡来し、平地から低山の落葉広葉樹林に生息・繁殖します。横枝や枯れ枝にとまり、空中を飛ぶ昆虫を捕食しているため、この種の鳥は英名でフライキャッチャーと呼ばれています。地鳴きはツイーと細く、囀りは小聲で複雑です。市内では、秋の渡りのシーズンの9月から10月にかけて稲荷山公園・智光山公園などで毎年観察されています。



撮影：奥生熊希保護協会狭山支部
矢内昭夫さん（水野）